

工事の げんば 現場より

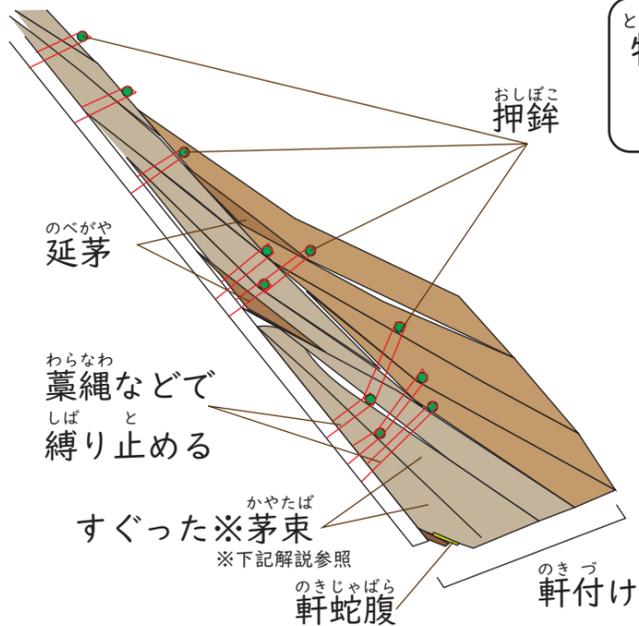


今はこんな様子だよ。



4月3週目

令和2年度より半解体修理を始めた旧東慶寺仏殿では、大工さんによる屋根の骨組みの組立が済み、続いて新しい茅葺屋根を葺く作業に入るため屋根葺き職人さんにバトンタッチ。下地の骨組みを組んだら軒先に「軒蛇腹」を取り付け、ようやく茅葺本体の施工に取り掛かります。茅葺は葺きあがってしまうと施工方法の違いが分かりにくいのですが、実際は葺き方が地域ごと・流派ごとでも多種多様。今回は神奈川県央域で培われた「下葺き」という工法が用いられています。

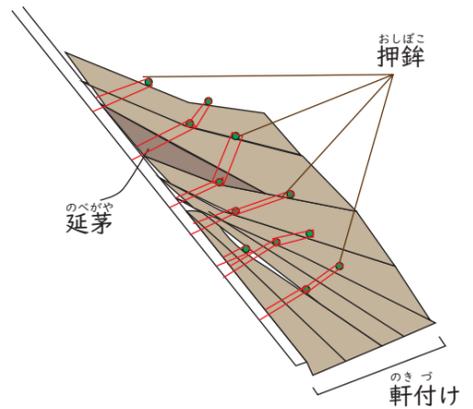


特徴的な葺き方：下葺き工法
＜模式断面図＞

最近の施工事例
日向薬師方丈坊（伊勢原）

参考：一般的な葺き方
＜模式断面図＞

まず屋根面全体を厚さ20cm程の薄さで葺いて、その上にさらに茅を重ねて屋根を作り上げていきます。メリットは傷みやすい表面だけを取り換えやすいこと、表面に出やすい押針の取り縄が小屋組みまで入り込まないため雨漏り発生リスクが下がるということです。一方、葺き厚が薄いため押針が露出しやすく、上葺きが傷みやすいというデメリットがあります。



▲ 下葺きとして薄く茅を葺きあげていきます。この上
上葺きを重ねるので、押針竹は露出しています。

▲ 薄く葺いた下葺きの上に重ねて、厚みと屋根形を
整えながら上葺きを葺いていきます。



茅は屋根を葺くのに適切な、上にすばんだ円錐形になるように加工する（すぐる）下準備を行います。今回用いられている茅は静岡・御殿場産のススキと、熊本・阿蘇産のススキです。

